



秘仏薬師瑠璃光如来坐像 都

涼水山不動院 西蓮寺
(お寺の通称) かのやの薬師

「かのやの薬師」と親しまれている東
京都重要文化財指定の秘仏薬師瑠璃光
如来坐像が九月十一日六十年ぶりに御
開帳を迎えた。この木造坐像は、総高四
尺八寸（約百六十^{cm}）で鎌倉様式を残
す室町時代の作とつたえられている。

脇侍には日光・月光両菩薩それに眷属
の十二神将を従えており何れも同時代
に造顕されたものといわれている。

また、天正年間（一五七三〜九二）八
王子城主北条氏照老臣中山勘解由は、当
山の薬師如来像を厚く尊崇し参籠の際、
邸内の愛樹の杉松二種を植栽している。
境内にはその名木記念碑がある。

散歩のみどころ

千人町の追分から始まる陣馬街道、薬師前バス停から式分方入口バス停までの、およそ5kmの行程。

バス停から右に歩くと西蓮寺がある。東京都の重文である薬師堂付厨子が有名。西蓮寺から少し歩き、住吉神社へ。珍しい鰐口が保存されている。神社を出て北へ歩くと八王子城の鬼門に当たる相即寺。そこから、学童が疎開をしていた隣保館跡を見ながら、湧水の春日池や弁天池児童公園に至る。さらに歩くと、自由民権運動の発祥を記念した先覚之碑のある泉町会館に着く。会館から、聖マリア教会堂を見学し、近くにある自由民権運動に活躍した人が眠る喜願寺跡の墓地を見学。その後、泉町の湧水郡を見ながら松枝橋へ。松枝橋から北浅川の堤防を上流へ暫く歩くと、八王子のランドキャニオンといわれる場所に出る。子供キャンプ場を抜け、榛名神社や石造物を見て陣馬街道のバス停で解散。

①陣馬街道

以前は恩方街道といわれていた道は、昭和三十八年（一九六三）陣馬街道と改称した。それまでは、案下道とか佐野川往還とも呼ばれ、甲州道中の脇往還として利用されていた。追分を起点に、横川、大楽寺、寺方、恩方を経て和田峠を越え、相模の佐野川から、さらに甲斐の上野原へ至り、そこで再び甲州道中に合流している。

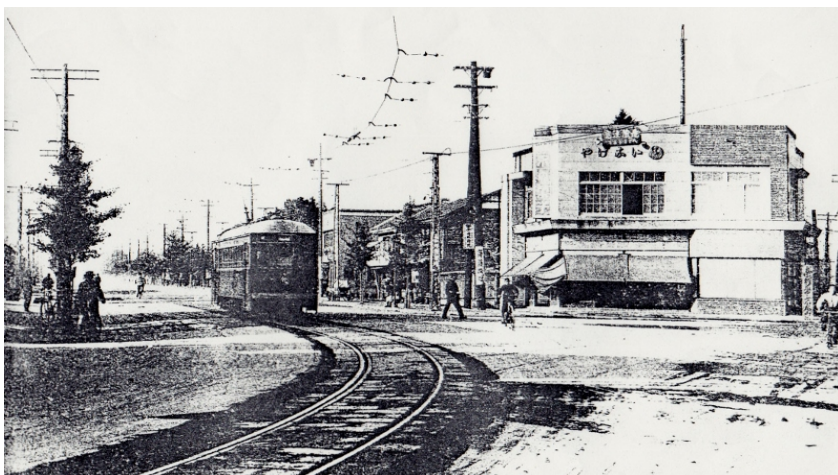
甲州道中が五街道の一つとして整備され、遠方からの旅人や参勤交代等にも利用されていたのに対し、陣馬街道は、街道沿いの村人たちが、主に炭や食料などの日常生活用品の運搬に利用していた生活道路であった。今では陣馬山と市街地を結ぶ、ハイカーたちには馴染み深い道となっている。道端の道標には、「左甲州道中高尾山道、右あんげ道。文化八年（一八一）六月江戸清八」と彫られている。



千人町追分交差点にある現在の道標
左：甲州道中高尾山 右：あんげ道



旧道標



昭和初期頃の追分交差点



現 追分交差点

② 涼水山不動院 西蓮寺 さいれんじ

大樂寺五六六

宗派 真言宗智山派

本尊 不動明王（江戸中期作）

寺宝 本尊不動明王、大日如来、毘

沙門天、地藏菩薩、立ち不動

（江戸期作）、薬師如来坐像、

薬師堂内の厨子

開山 祐真法印

開創 永享元年（一四二九）

もともとここには同じ宝生寺末寺の金谷寺があったが、西蓮寺に合併され明治二十八年（一八九五）再建された。

当寺は、祐真法印により檜原村の浅川北岸に創建されたが、その後、現在地の北側下壱分方村一一九四（現叶谷町）に移転した。当時華川山不動院と号して、北条氏照の祈願所であった。本堂十一間（十九・八m）四方の堂々たる伽藍であった。仁王門と薬師堂は金谷寺から引き継いだものである。



西蓮寺本堂



西蓮寺仁王門

境内にある旧金谷寺にあった薬師堂は、室町時代末期の建立で寄棟造り。堂内安置の厨子とともに東京都の重要文化財である。このお堂は、天正十八年（一五九〇）八王子城攻めの際、前田利家の兵が堂内で炊事したため、焼け焦げた跡が残っている。薬師堂には、室町期の薬師如来坐像などが安置され、目の薬師様として信仰され、「め」の文字を二つ書いた絵馬が奉納されている。

● 薬師堂 付厨子 厨



きんやじ
旧金谷寺所属の仁王門



「め」の絵馬



西蓮寺薬師堂

平成二十六年に六十年ぶりに厨子が御開帳された。

●北条氏朱印状

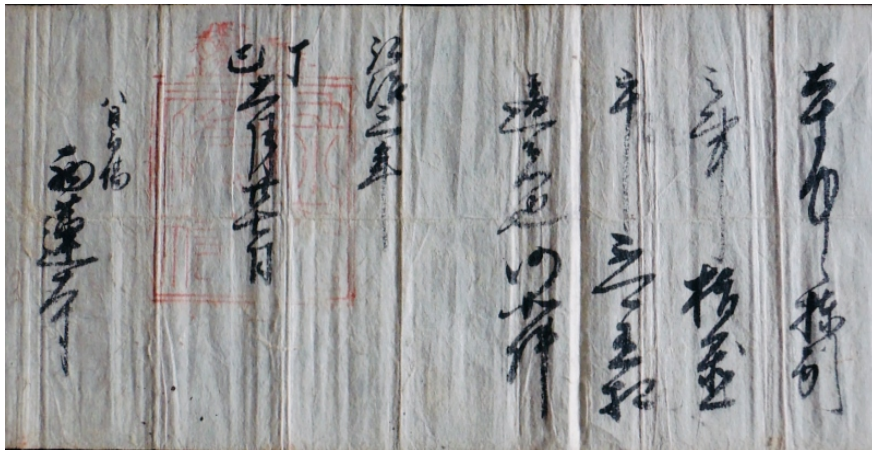
弘治三年（一五五七）発給。「八日市場西蓮寺」とあり、当時この近辺に八王子城の八日市場があったことがわかる。



薬師如来坐像



堂内の厨子は室町後期作。十二神将に守られた中には秘仏の薬師如来三尊が安置されている。



北条氏朱印状（非公開）

●多氷屯倉遺跡碑

たひみやけ

仁王門の東側に多氷屯倉遺跡碑がある。日本書紀に出てくる安閑天皇の時代（五二五）、武藏国の造（みやつこ）、笠原直臣（あたのおみ）が、朝廷に献上した「屯倉」の一箇所が由井野を中心とした地であるとして建てられたものである。

碑には、一九五五年多摩地方史研究団体連合会とあることから、橋本義夫氏達により建てられた碑である。（橋本義夫著『砂漠に樹を』に、「多氷の屯倉」の建碑の企画に関する記述がある。）



多氷屯倉遺跡碑

● 弁財天

以前は、西蓮寺前に弁天池があった。池の中に弁天堂が祀られており、蓮の花が咲き、鯉も泳ぐ長閑なところだった。また、この付近は華川といい、蜚の名所として賑わったという。現在は、境内に新たな弁財天が安置されている。



弁財天

③ 住吉神社

叶谷町一〇七二

勧請 寛平年間（八八九〜八九七）
祭神 上筒男命、中筒男命、
底筒男命

社宝 棟札（元禄、寛政、弘化）

古鏡

鰐口（永禄三年（一五六〇））

古くは鵜森神社とも呼ばれていた。かつて神社のうしろ一体は沼地で、水鳥が多く住み、中でも鵜がこの神社の森に巣を営んだことから、鵜森神社といわれた。現在でも神社の裏手には湧水がある。

天延四年（九七六）再建した時の棟札は、八王子で最も古いもの。

永承六年（一〇五一）前九年の役の時、源頼義が三田源五広綱に命じて、大阪の住吉神社を勧請したという。

天福元年（一二三三）北条時頼が武運を祈願した棟札がある。

天正十年（一五八二）八王子城主

北条氏照が城の鬼門除けとして再建。天正十八年（一五九〇）、八王子城落城とともに焼失した。朱印十石拝領。社殿は江戸時代に再興された。拝殿は昭和五十五年（一九八〇）の造営。境内には稲荷社、天神社、桑森神社の三社がある。



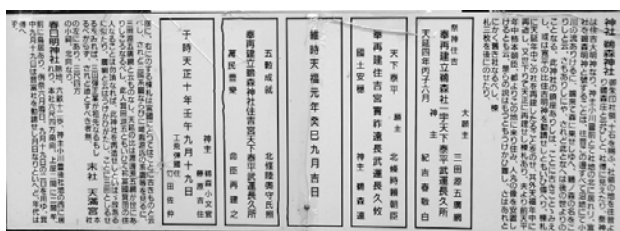
住吉神社鳥居



見事な彫刻



奥 社



棟 札



永禄3年(1560)

④東原山浄土院相即寺

泉町一一三二

宗派 浄土宗

本尊 阿弥陀如来

寺宝 阿弥陀如来坐像(鎌倉中期)

万目供養地藏菩薩 匱

延命地藏(ランドセル地藏)

開山 忍誉貞安上人

開創 天文十五年(一五四六)

開帳 六月二十三日、七月八日、

八月八日

北条氏照の祈願所であり、もとは東源山と号した。八王子城の北東に位置することから、城の鬼門除けとしての役割を担った。

慶安元年(一六四八年)第三代将

軍徳川家光から朱印状を受ける。

地藏堂には八王子城落城の時に戦死した者を弔うために作られた地藏が百五十体祀られている。



本 堂



参道と総門

● 阿弥陀如来立像
明治六年（一八七三）四月、西蓮寺の近くにあった喜願寺から出火。喜願寺は焼失したが、奇跡的に阿弥陀如来立像が運び出され、相即時に安置された。しかし、出火時に煙や炎に包まれ全体が黒く焦げている。



阿弥陀如来坐像



本堂内の札簡



本堂内の阿弥陀如来立像

●地蔵堂

天正十八年（一五九〇）六月二十三日、朝も暗いうち、豊臣勢一万五千に攻撃された。八王子城は一日で落城し、皆殺しに遭った一千余人の大半は、農民だったという。なかには女子供も含まれ、麓の川は三日三晩、血で染まったという。

争いの悲惨さは、昔も今も変わらない。相即寺の西南五km、北条氏照の居城、八王子城が落城の際、戦死した人の内、相即時縁故者二百八十三人の供養のため、百五十体の地蔵が祀られた。

地蔵の顔はどれ一つ同じ顔がない。怒り憎しみかと思いきや、なぜか穏やかな顔だ。

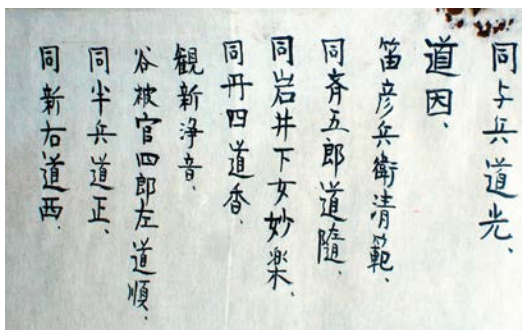
地蔵尊表面台座の左には、戦死者名前が記されている。



地蔵菩薩



地蔵堂全景



八王子城 落城戦死者名の一部
(笛彦兵衛清範は北条氏照の家臣で笛の名人)



地蔵150体の一部

●銅造り地蔵菩薩坐像

本堂正面、向かって左側の参道脇に建つ。通称「万目供養仏」台座を含めた高さ一・九mの青銅仏で、安永五年（一七七六）から十三年をかけて、加藤鋳物師のうちの一人、加藤甚左衛門によって作られた。

加藤鋳物師とは、加藤姓を名乗る鋳物師の集団で、戦国時代から代々横川村（現・横川町）に居住し、八十以上の作品を残した。市内に限らず、広く西多摩地方にも、その作例が知られている。



万目供養仏

●機銃掃射の跡

山門の左側の扉には、十円玉ほどの穴があいている。昭和二十年八月一日夜から二日未明にかけてアメリカ軍の爆撃機により、八王子市内中心部が壊滅する空襲があった。その際にP51戦闘機による機銃掃射を受けてあいた穴の痕跡が残っている。



総門扉に残る機銃掃射穴



まんもく
万目供養仏

●檜松

相即寺の門を入ると右側に檜松という珍しい名木がある。檜木の途中から松の木が生えているが、昭和四十年九月の台風により倒れ、現在は僅かに生きながらえている状態である。



檜 松



●徳利形の墓

横川村滝原には、鋳物を業とした加藤氏の一族がいた。中でも、金五郎という人は、釣り鐘師として世に聞こえた名工だったが、大の酒好きで、仕事以外いつも徳利を放さなかった。金五郎が天寿を全うした後、家人が酒好きの彼のために徳利の形をした墓をこしらえたもの。



徳利形の墓

●ランドセル地蔵

太平洋戦争末期の昭和二十年七月八日、東京品川区原国民学校五年生神尾明治（あきじ）君（当時十歳）が、学童疎開先の相即寺近くのこの地で、米軍戦闘機の銃撃に遭い、幼い命を散らせた。

知らせを受けて、かけつけた母喜美枝さんは、明治君が生前大切にしていた皮のランドセルを、地蔵堂のお地藏様の中で、明治君に一番似ているお地藏様に掛け、品川に帰った。だが、再び地蔵堂に参拝することなく、昭和二十一年二月二十八日散華している。

ランドセル地蔵尊は、今も平和を祈りながら、明治君のランドセルを背負って静かにたっている。

昭和十九年（一九四四）に入り、戦局は日増しに悪化。敵機が日本本土を空襲する可能性も必至のこととなった。政府は幼児、学童及び六十歳以上の老人、防空の足手まといに

なる者、生産力に貢献出来ない者を地方へ疎開させる計画を立てた。六月、東京都及び十二の都市で、学童集団疎開の実施に踏みきった。

品川区原国民学校の児童約四百人は、八月に元八王子村、恩方に集団疎開した。元八王子地区には百八十人が疎開し、隣保館（当時保育所）や、相即寺、西蓮寺、公会堂二箇所の計五箇所に分散。食料難に加えて親元を離れた辛く寂しい生活を余儀なくされた。



地蔵堂外



地蔵堂内

ランドセル地蔵

集団疎開の日記より（隣保管）



原国民学校の児童達が疎開していた当時の元八王子村の隣保館。左側の樹木が相即寺境内

「集団疎開の日記より」

品川区立原国民学校 五年一組

北川菅雄

疎開先 南多摩郡元八王子村隣保館
（旧かなづかいで書かれていますので、現代かなづかいにしました。）

「起床！」の声に、布団をはねのけた。大寒をむかえた寒い朝である。

すぐに、敷布団を三つ折りにして観音開きの戸棚にしまう。かけ布団は、上の戸棚へ積み重ねてしまう。一番最後に持ってきた三年生の神尾君のは、ぼくと吉田先生とで、天井に近い所へかつき上げた。

「全員洗面」と吉田先生のいつものかん高い声。着替えをして、窓ぎわに干してあった手ぬぐいを取り、柳行李（やなぎこうり）の上にある歯磨き粉の入った紙袋とかなり毛の抜けた歯ブラシを持って玄関のげた箱の所へいそぐ。

ぼくのききょうの花の模様の入っ

た手ぬぐいは、けさの寒さでバリバリに凍りついている。山中君は自分の凍りついている手ぬぐいを手の平の上にたててみせた。

「ほら、洗い貼りをしたようだね」といつて笑った。げた箱から、歯のすり減って左右に傾き、不安定な下駄を土間の上にやや乱暴においてつかけると、ステールファイバー（人造絹糸）の靴下は、もちろんも破れて左足の親指がまたも姿をあらわした。これで両方あわせて、九箇所も破れているがいつものこととて気にもしない。駆け足で隣保館の門のすぐ外に流れている、小川へ急いだ。（小川の幅は約二メートル）右手の林の奥の泉からこんこんと湧き出す水は清く、水の量もとても豊かで、水辺のせりやいろいろな水草を横に押し流している。

歯磨きの粉がのどにつかえて「ゴホン、ゴホン」とせき込んでいるのは山田さんだ。霜で真っ白になっている枯れ草の上に、手ぬぐいと歯ブ

ラシなどをおいて、かじかんだ手で背をまるくしながら、小川の水をすくってグブグブとやった。手は、たちまち真っ赤になり、口の中の感覚がなくなる。冷たい。吉田先生は、この前寒暖計をいれたら二度だったとおっしゃっていられた。

「カーン、カーン、カーン」始まった。隣りの相即寺の朝のおつとめ。午前六時三十分きっかり。鐘の音においたてられながら顔を小川の水でやけくそにこする。

宿舎への帰り道、半分凍った手ぬぐいで、あごからおちる水をふきふき、話しながら帰る。洗面具をいつもの所へおいて、女子は部屋掃除。男は庭掃除。玄関から門まで、竹ぼうきとくまでで扇型の模様をつけたがらはく。手袋なしだから手に息を「ハー、ハー」かけながらやる。ぼくも山中君も木岡くんもみんな手に霜焼けができていたので、あまり効果がないがライスタム（ぬり薬）をぬる。

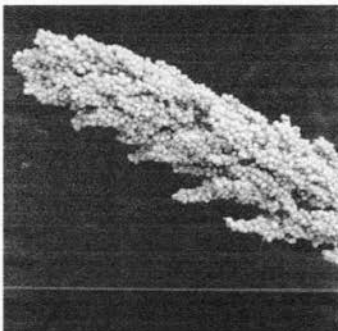
三センチぐらいある霜柱がくまで堀おこされる。相即寺の鐘の音とピツタリ調子が合っておもしろい。相即寺の和尚さんの低いお経の声がいやに大きく聞こえるときがある。寮母さんの出羽さんが「食事当番の人、だあれ」「いきますよう」という。

叶屋公会堂の炊事場まで往復二町（八〇〇メートル）はある。三十二人分のこうりやんご飯とみずな塩づけを木製のバケツにいれてもらいにいった。

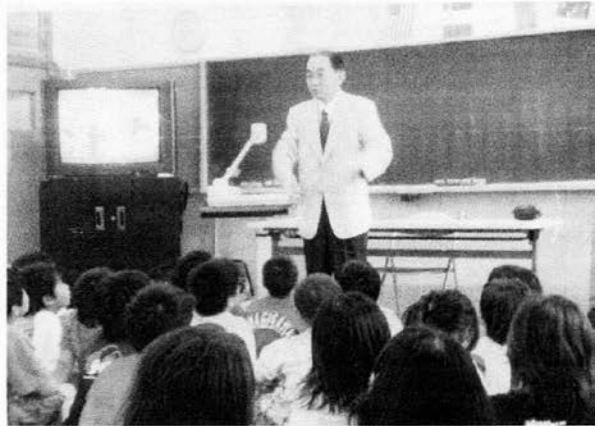
きょうは、ぼくと木岡君と山中君でとりにいった。寮母さんと五年の阿部くんが途中まで迎えにきてくれた。バケツの針金が手にくいこんで、冷たいやら、痛いやら。以下略。



品川区立
原小学校の校章



「お米はなく一日二食のコーリアン」



学童疎開、八王子空襲の体験を話す 北川普雄氏

集団疎開した元八王子村隣保館にて

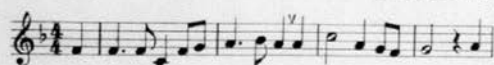
明治君の兄さん

北川菅雄氏



原小学校校歌

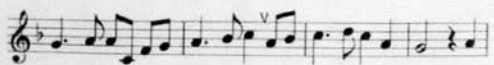
上南鉄太郎 作詞
外山国彦 作曲



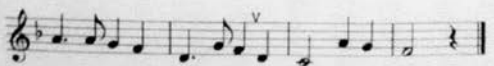
1. みやこのみーなーみしながわーのあ
2. つよーくたーだーしほがらかーにま
3. にしーにそーびあるふじがねーのけ



さなぎひろーくきはすみてな
ことのみちーにいそしみてよ
だかきすがーたこころとしお



がーめーはーるけきふーみーのまどわ
きーくーにーたみとなーれーかしとわ
おーきーのーぞみをわーねーにしめわ



れらはまなぶいまこころに
れらはまなぶいまこころに
れらはまなぶいまこころに



戦闘機の機銃掃射で犠牲になった、神尾明治君

⑤春日池（華川の泉）

大楽寺にある西蓮寺境内の池から流れ出る小川が、華川である。江戸時代末期編纂の武藏名勝図絵に「この池は華川の水源ゆえに螢多し」とある。今でもここに二つの源泉がある。一つは、児童遊園になっている弁天池、もう一つは大きな榎の根元から湧き出している泉。この泉は通称「華（花）川の泉」、または「春日の池」と呼ばれている。

華川は、この二つの泉から相即寺の前を経由して城山川に注ぐ。今、その川幅は1m足らずで、ただの水路にしか映らないが、かつては3mほどもあったという。

終戦直後の記憶として、土地の人の話を聞いた。「食べるものが少なく、サツマ芋の粉を蒸した黒い団子が何よりのご馳走だった。団子が蒸し上がるまで、華川で木に登ったり小魚を捕ったりして遊んだんだよ」とのことだった。



かつての春日池

●春日大明神の碑（小川家）

春日池の隣りに住む小川家には、春日神社の宮司を務めていたという古い文献が残されている。小川家の庭の祠には、春日大明神の石碑、石像がある。また、小川大隅守を宮司とする明和五年（一七六八）の許可文書、そして狩野柳雪の一幅とされる掛け軸などが保存されている。



現在の春日池



小川大隈守の掛け軸



小川大隈守を春日神社の
宮司にするという許可文書
明和 5 年（1768）



春日大明神の石碑と石象



春日大明神の祠

泉町のほぼ中央に、湧水池のある泉町弁天池児童遊園がある。この遊園地は、昭和三十一年（一九五六）、旧大字下壺分方の一部が泉町になったのを記念して造られたもの。この周辺は、北浅川、城山川、大沢川からできた扇状地であり、湧水が多く町名の由来にもなっている。かつての清水の池は、現在見る影もない。

⑥ 泉町弁天池児童遊園



狩野柳雪の掛け軸



泉町井天池児童遊園

⑦先覚之碑

先覚の碑は、泉町会館の敷地内に、昭和三十二年（一九五七）、橋本義雄、岡村保雄氏らによって建てられ、多摩の先駆者達が顕彰する碑である。この地に建てられるについては、日本の近代史の一項に書き加えるほどの画期的動きがあったことが伺える。多くの人たちがカトリックへの入信や、自由民権運動に活躍し、また地元産業の育成発展に精力的に取り組み、多摩を中心に日本の近代化へ大きく貢献した。



先覚之碑文

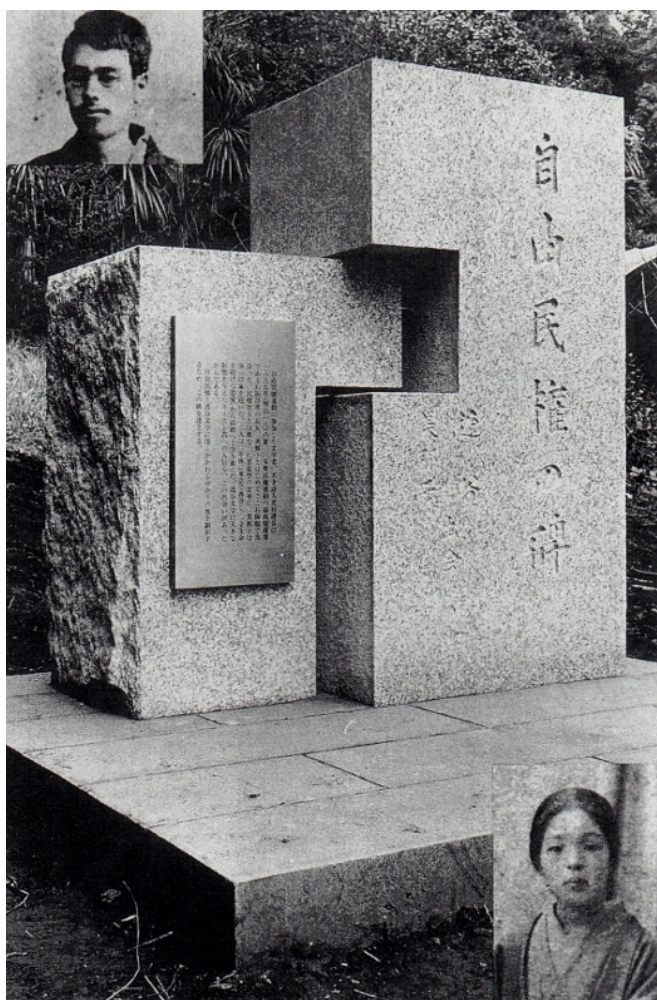
先覚之碑文

近在日本史上画期的な偉業を記念す明治の初年維新革命の目的を完成し、永い封建の真黒い幕を取り除く為に、日本の先覚者達は、ここ柏木豊治郎邸に集うた。

板垣退助、石坂昌孝、星亨、村野常右エ門、大江卓、森久保作造、景山英子、林副重等々、外有名無名の人々、特に村内の先駆者八氏を交えて自由と平等を基とする、人民自らの政権を目指し、廣く教育に、文化に、宗教に、産業に志を一にし、先駆者の偉業が発達した近代日本史は、先ず、元八王子より輝いた。

一九五七年十一月三

撰文 先駆者讃碑建設委員会



自由民権の碑

北村透谷 美那子の出会い

昭和六十年 (1985)

十一月三日 文化の日

東京都町田市野津田町二二七四

「民権の森」内に建立。

碑の下には民権家石坂昌孝

の屋敷跡。

揮毫は色川大吉氏

撰文は渡辺 奨氏らの名が

刻まれている

⑧ 聖マリア教会堂

(カトリック教会)

陣馬街道沿いの泉町に「カトリック泉町教会」(聖瑪利亜教会)がある。三多摩で一番古い最も由緒ある教会である。

明治六年、ようやくキリスト教が解禁となった。横浜でテストヴィド神父を知り、自由平等に目覚めた二十三歳の山上卓樹が、この開明期に故郷泉町の地元有志の協力を得て、明治十年聖マリア教会を建て、ここからカトリックの伝道が始まった。当時この地のほとんどの家、百五十戸三百名以上が入信し、村民は神父の寺子屋で文字を学んだため、この地に文盲の人はいなかったという。キリスト教はここから立川、五日市などの多摩各地に拡まった。教会は昭和五十二年(一九七七)に記念すべき「百年祭」を迎えている。



教会のマーク



聖マリア教会堂
1877 年建堂 1927 年再建



聖マリア教会堂

● フランスの鐘

当時は、毎朝澄んだ高い音を一带に響き渡らせていた。その鐘も、終戦直前、日本軍によって供出を余儀なくされ、行方はわからないまま。戦後、信者達により新しい鐘が奉納された。

● ステンドガラス

聖堂奥の両側の窓は、堂再建当時(昭和二年)からのもので、二重窓ステンドガラスになっている。



マリア像

⑨喜願寺泉共同墓地

皇国地誌の多摩郡下壱分方町誌の中の記録によると、喜願寺は明治六年に火災に遭い、明治十八年（一八八五）廃寺になっている。創建年代は不明だが、相模原市当麻の無量寺末であった。境内は、東西九間、南北十間一尺二寸、面積九十二坪あったという。現在、跡地は共同墓地となり、自由民権運動で活躍した人の墓もある。多くの墓石の上部には十字架が刻まれ、その隣の「霊名」にはカトリック教徒の洗礼名と本名が刻まれている。



喜願寺泉共同墓地の一部

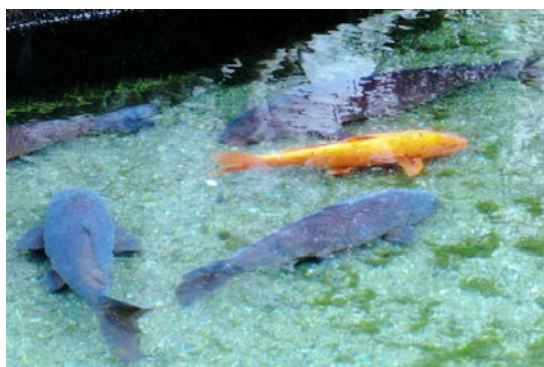
⑩泉町湧水群

泉町界隈の各所から綺麗な水が湧き出ている。以前は、この湧水で山葵を栽培していたという。

現在、この湧水を利用し蛍の名所にしようとカワニナを増やす地道な努力をしている蛍養殖推進グループがいる。カワニナは年々が増えており、近い将来蛍の乱舞が見られるのではと期待している。また、自宅の庭に水を引き、観賞用の鯉を飼っている家もあるという。



泉町界隈を流れる湧水



鯉



カワニナが生息する湧水



クレソンが繁茂する小川



水辺のサギ



北浅川にあるグランドキャニオンと云われる所（上壱分方町）

⑪ 浅川のグランドキャニオン

上壱分方町

上壱分方小学校北側を流れる浅川には、数百mに亘る溪流がある。そこが何時の頃からか、アメリカのグランドキャニオンを模して「浅川のグランドキャニオン」と云われている。この溪流は、新生代第三紀からなり、二千三百万年前の地層が自然界の影響で溪流となり出土し、地質学上貴重な場所といわれている。また、この川の周辺には、落葉針葉樹の化石メタセコイヤも出土している。

⑫ 上壱分方の榛名神社

勧請 群馬県榛名神社

祭神 埴山毘売神

開創 文政十年（一八二七）丁亥三月十五日

例祭 三月十五日
（現在、三月最終日曜日）

上壱分方町の榛名神社は、「おはんなさま」として親しまれている。この神社は江戸時代後期西暦一八二七年、農作物の豊作、雹の災害除け祈願のため、群馬県榛名山の榛名神社から勧請したもの。

祠は昭和四十一年頃再建され、中央には御札が奉られている。正面右に「文政十年（一八二七）丁亥三月吉日セワ人小林新八」、左に「和田村、大楽村、大柳村講中」と刻まれている。また、祠の前には、満行宮の灯籠が建てられている。東側に「安政三年（一八五六）丙辰三月」、西側に「天下太平五穀豊穰」、座右には「氏子中」と刻まれている。

以前は八十八夜、二百十日にはお燈明をあげ、豊作祈願の祭礼や三月十五日のお日待ち行事などが行われたという。現在は、上壱分方町の神戸、大柳両町会合同で祭礼等引き継がれている。



榛名神社全景



榛名神社

⑬ 大柳の石造物

上壱分方町四一四

大柳会館前には、地蔵など五基の石造物が祀られ、灯籠も新しく建てられている。向って右から年代不明の「南無阿弥陀仏」と書かれた石塔。その左は、「元文四年（一七三九）霜



榛名神社お札が収められている祠



大柳延命地蔵尊全景

月中旬十月七日」銘の庚申塔。中央には、平成九年（一九九七）に建立した延命地藏尊が安置されている。その左には、庚申塔と同じ頃と思われる年代不明の地藏尊がある。これは、大柳村入口にあったものを、昭和四十年にここへ移したものである。さらに左には、舟形の馬頭観音が祀られている。いずれも無病息災、五穀豊穡の願いを込めた石造物である。



大柳延命地藏尊

◎参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
 - ・武蔵名勝図絵
 - ・八王子市史
 - ・八王子事典
 - ・八王子寺院めぐり
 - ・八王子市資料館資料
 - ・北川菅雄資料
 - ・佐野川往還の環境遺産と文化遺産
 - ・インターネット各ページ
 - ・八王子市地図
 - ・八王子市観光マップ
 - ・元八王子の歴史散歩資料
 - ・昭文社地図
- 小山祐三著